

朝鮮民主主義人民共和国で考える
—林明夫の視察シリーズⅢ—

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

「何で今ごろあのようなこわい国に行くのか、また行ったのか」と何十人もの方々から質問を受けた。パリで編集し、衛星で送られた内容が東京で印刷されている「ヘラルド・トリビューン」という日刊の英字新聞と、ロンドンで編集され、衛星で送られた内容がホンコンで印刷された週刊の英文雑誌「エコノミスト」は、どちらも世界中同じ内容だが、ここ数ヵ月間、この国のことが出ていないことがない。もちろん英語版の週刊誌「タイム」や「ニューズウィーク」の各アジア版にはここ数ヵ月毎号この国の記事が掲載され、最近では記事の分量がだんだん増えてきた。特集記事すら出始めた。日本の新聞やテレビもシリーズで「食糧危機」「経済危機」「国家の破綻」を問題にしはじめた。「何でこの時期にそのような国に行くのか」と多くの方々がご心配下さったのも十分理解できる。視察シリーズ第3回目の今回はその朝鮮民主主義人民共和国からの報告である。(お読みになりやすいように今回はQ&A方式で書かせて頂く。)

2. 「普通の国にならざるを得ない朝鮮民主主義人民共和国」

Q1：どのような経緯で行くことになったのですか。

A：私の尊敬する高井伸夫法律事務所の高井伸夫先生から訪問団を組織したので行かないかとお誘いを受け、私も非常に関心があったので同行させて頂きました。29名の訪問団でした。

Q2：いつごろどこから行ったのですか。

A：今年のゴールデンウィークの始まりの4月28日(月)から5月3日(土)までの5泊6日の日程でした。130名乗りのコリョ航空機を使い、名古屋空港からピョンヤン順安空港まで2時間15分の空の旅でした。この国と日本には航空協定があり、一年に20便のチャーター便が日本の空港からピョンヤンまで行くことになっているそうです。ただ近年は、ゴールデンウィークやお盆中などを中心に年に10便位しか直行のチャーター便は出ていないそうです。

Q3：どんなところに泊りましたか。また、あちこち行くのは自由でしたか。カメラやビデオの撮影は自由でしたか。

A：宿泊はその国で一番よい外国人用のホテルでした。ベッドルームの他に書斎や居間、トイレが入口とベッドルームの奥と二つもついている広々とした部屋でした。日本にも自由に電

話やファックスができました。外出は全く自由でした。ピョンヤン市内ならどこへでも自由に行けました。ただ、ハングル文字が読めず、また、ハングル語が使えないと迷子になった時困るので、外出は二人以上できるように注意を受けました。朝5時から一人で街を散歩した方もおられました。カメラやビデオでの撮影は全く自由でした。何の制約も受けませんでした。NHKのアナウンサーの高井真理子さんとTBS系の番組制作会社の方も同行なさっておられましたが、お二人ともずっと小型ビデオをまわしておられました。

Q4：街の様子はどうでしたか。

A：人口300万人といわれるピョンヤン市内は1959年の朝鮮戦争でほとんど廃墟となった後、建設された都市なので広い道路で緑豊かな整然とした美しい街並でした。一階がお店の高層アパートが林立している様子には驚きました。路上生活者や、物乞いの人、物売りの人は一人も見られない、ゴミ一つ落ちていない清潔感あふれる都市でした。核シェルターにも使われるという地下100mのところを走る地下鉄にも乗りました。シャンデリアの光かがやく素晴らしい駅構内でした。少し混雑していた地下鉄内では小学生に席を譲られその親切に感じ入りました。広い通りなのに乗用車はベンツが何台か走っているだけでした。乗用車は政府関係の人しか利用しないようです。自転車やオートバイはほんの数台しか5日間で見ませんでした。人々はピョンヤン市内では地下鉄とトロリーバスとバスを利用して、市外ではバスとトラックの荷台を利用して移動。あとはすべて徒歩。みんなテコテコ歩いていました。となり町へ行くのにも歩いていました。バス利用の訪問者である我々ですら、1日1.5万歩平均歩きましたので、おそらく、ほとんどの国民が毎日1万歩以上は歩いていると思いました。

Q5 人々はどんなものを身に付け、また、食べていましたか。

A. 我々は訪問団なので、食べ物は十二分に出されました。こんなぜいたくなものを口にしてはこの国の人に申し訳ないと思われるようなものが毎食出されました。ただ、口をつけたものを残しては、国情を考えると申し訳ないと思ひまして口をつけたものはなるべく全部食べるようにしましたら、2kgも体重が増えてしまいました。普通の人々がなにを食べているかは実際よくわかりませんでした。メイ・デーの5月1日に公園に行きましたが、サンドウィッチやおにぎりのようなものと簡単な果物と水をもって、ピクニックをしていた人が多かったように思えます。

ただよくよく聞いていくと、その公園に来られるような人々は非常によい方で、一日一食の人が多くとお聞きしました。子供の顔や身体つきも年齢にしては2～3才小さいような気もしました。どこへ行ってもみなこざっぱりしたものを身に付けておられました。ただ衣服の材質は余りよくないようでした。革の靴はフォーマルの時で普段はズックの靴を身に付ける人が多いようでした。物は月2回配られる配給切符を持っていくと売ってくれるようです。食べ物の配給が随分と少なくなっているとお聞きしました。みんなでデパートに行つて来ました。大体のものはそこで買えるようですが、月収で日本円にして5000～9000円の方が多いとお聞きしていましたので、その収入では余り買えるものがないのではと思いました。女性用のひざ上までのストッキングが15ウォン(約900円)もするのには驚きました。私は外国

に行くとは宿泊先のホテルでよく床屋さんに行きますが、ピョンヤンのホテルでは 15 ウォン (約 900 円) でした。約 1 時間かけていねいにピョンヤン・カットをして下さいました。(ホテル以外では 10 分の 1 以下の価格だとお聞きしました。)

Q 6 : なぜ言われるような食糧危機、経済危機になってしまったと考えますか。

A : これは私の考えで、これが正しいかどうかはあと何年かたたないとわかりませんが、私は次のように考えます。この国は 1950 年の朝鮮戦争以来自国と社会主義の陣営を守るために国をあげて軍事の充実を図ってきました。旧ソ連や中国もこの国を物心両面から支援。特に石油は国際価格の約 10 分の 1 の価格で入れてきたようです。旧ソ連が崩壊し、中国とも以前ほど緊密な関係でなくなった現在、石油なども国際相場で買わざるを得ません。外貨を蓄える経済的なしきみを十分備えていなかったせい、大洪水があつて食糧が足りなくなつても外国から買うことができない。外貨がないから外国から石油を買うことができない。このようにしてエネルギーや食糧危機が発生し、国民の生活が苦しくなつていったのだと思います。(大洪水の水が炭鉱に入り火力発電用の石炭の採掘が困難になつたのがエネルギー危機の原因ともお聞きしました。)

Q 7 : ではどうしたらいいと思いますか。

A : 世界の現実を直視し「普通の国」になる努力を始めるしかない、と思います。とりあえずは日本も含めて、韓国やアメリカ等近隣の国々と国交を締結する努力を今までにも増してすべきと考えます。相互不可侵条約を一日も早く締結すべきかと思ひます。ベトナムがアメリカとの間で行方不明米兵の探索についての協力を引き受けてから経済の開放が始まり、以来経済つまり人々の生活が数段よくなりました。もしかしたらこの国も、アメリカとの間で朝鮮戦争当時の行方不明米兵問題の解決をきっかけに国が開かれるかもしれません。その上でこの国は外貨を余りお持ちでないと思ひますので、外貨を獲得するための方策を外国の経済政策とりわけ産業政策の専門家の手を借りて立案するべきと思ひます。日本の通産省特に経済企画庁などはその専門集団ですので、できる Know HOW の協力はさせて頂くとよいと思ひます。年間で 1500 万人海外に行く日本人のたとえ 5% の 75 万人がこの国を訪れるようになるだけでも立派に観光は成り立ちます。日本人が買うに値するような物産品を各地で「一村一品」運動を起こして開発すれば、あれだけ風光明媚で清潔、クリーンで犯罪もない国なので各地方空港から飛行機を乗り入れさせれば、日本人は行かないはずはない。外国向けの紳士服を賃加工する繊維工場を見てきましたが、ジューキのミシンを使いよく仕事をなさつておられました。手先の器用なまじめな国民性なので、まずは軽工業の代表である繊維産業などを大展開させるとよいかもしれません。足利をはじめとする両毛地区の繊維業界の人も、国交が回復するようになったら是非この国を訪れ、業務の提携の可能性を搜られたらと思ひます。日本から 2 時間余りのところに最後の「投資の楽園」があるように思ひます。日本の投資がこの国の経済をスタートさせる原動力になり、国民生活のレベルを大幅に向上させます。

Q 8 : 日本はこの国とどうつき合っていけばよいと思いますか。

A : よく言われる通り、日本にとって最も困るのは、戦争が始まり、日本の国内がミサイルをはじめとする兵力で侵されることです。次に困るのが、この国から大量の難民が本州と九州の日本海岸の地域に押し寄せることだと思います。韓国でも中国でも、旧ソ連のロシアでもこの二つが最も困る問題となってくると思います。(ただ、地球上のどこの国でも近隣の国々とは戦争と難民の問題は発生する可能性がありますので、ことさら事を荒立てて考える必要はないと思います。過去の経緯を十分踏まえた上で、現実の問題と誠実に対処する以外に外交はありません。)アメリカや韓国・中国・旧ソ連と十分連絡をとりあいながら、国交を正常化すること。お互いに軍事的に侵略しないことを確認した上で、この国の援助をすること。民間レベルでは経済的に自立できるよう観光客を送り込み、また、直接投資をどんどんスタートすることが最も日本のためにもなるし、この国のためになる。この国との間で戦争や難民の問題をかかえるよりは、この国の素晴らしい風景や心暖まるこの国の人々と接するために、観光客として訪問させて頂いた方が、また、自分の仕事のパートナーとして勤勉なこの国の人々に協力をしてもらい自分の仕事を伸ばす協力をして頂いた方が、どんなによいかわからない。日本だけでなく韓国をはじめいろいろな近隣の国々もそう願っていると思います。この国が経済的に自立して外貨を蓄え、国民生活を向上してもらうことが、日本をはじめとする東アジアの平和と安全保障上も最も有益かと考えました。

3. おまけ

①朝鮮半島のどちらの国を訪問させて頂くときもやはり、ハングル語だけは少しは勉強してから行った方がよいコミュニケーションができるような気がしました。どちらの国でも物を大切にすると同時に弱者を助け年長者を敬う素晴らしい習慣がありますので、私も見習わねばと思いました。二つの国が一日も早く統一をされることを心から願いますが、当面それが困難であるならば、せめてこの国が経済的に自立し、国民生活が向上し、人々が生活の上で苦しむことのないようみんなで協力することが大事なかなと思いました。

②同じ人類が住んでいて「こわい国」などはないと思います。各々の国の事情でいろいろな困難なことはあるかもしれませんが、それはそれで問題が難しく奥深ければ急にどうなるということは余りないと思います。まずは興味があり、許可がおりればその国に行かせて頂き、実際の様子を見て頂くのが一番。

※次回の視察シリーズ第4回目は欧州統合のすすむ真ただ中の「ロンドン」からの報告の予定です。お楽しみに。